

『ダーバヴィル家のテス』試論(2)

— ハーディ文学の虚構と現実 —

船 山 良 一

はじめに

拙稿「『ダーバヴィル家のテス』¹⁾ 試論(1) — 悲劇の二重構造として」²⁾において、「テスの悲恋物語」は、19世紀イギリス農業の悲劇の象徴あるいはアレゴリーとして機能していることを明らかにしたが、小論ではフロントコム・アッシュの場面（第5～6編）を中心にその点をさらに具体的に論じてみたい。『テス』は、事実をありのままに描く自然主義的リアリズムとは趣を変え、事柄のリアリステックな描写とともに、大胆な虚構があり、イメージやシンボル等の記号的作用も豊富に駆使され、ふくらみと広がりをもって対象が描出される場所に特色がある。その点も併せて指摘することにした。

I

テスの人生は、トールボットヘイズ農場でエンジェルとの間に芽生えた恋のわずかな期間を除いて、ほぼ直線的に降下してゆく。その苦勞多く報われることのないはかない人生を、彼女の「徒歩の旅」が象徴している。当時の交通機関としては馬車が一般的であったことは作中からもうかがい知れるが、父親の業務用であった馬を事故で失って以来 — それが一家の零落の端緒となる —、彼女の移動はたいがい徒歩によってなされる。「一人の清純で素朴な冬姿をした百姓女」となってテスはとぼとぼと歩き続けた。彼女にはもはや若い情熱のきざしは見えなかった。歩いてゆく目的が冬の仕事と冬の住家とであったから、彼女には一刻の猶予もならなかった。(304-5)

Thus she went forward from farm to farm in the direction of

the place whence Marian had written to her, which she determined to make use of as a last shift only, its rumoured stringencies being the reverse of tempting. First she inquired for the lighter kinds of employment, and, as acceptance in any variety of these grew hopeless, applied next for the less light, till, beginning with the dairy and poultry tendance that she liked best, she ended with the heavy and coarse pursuits which she liked least — work on arable land... She had, in fact, reached Flintcomb-Ash... There seemed to be no help for it; hither she was doomed to come.(305-6)

「古靴事件」のあと、徒労に終わったエミンスター訪問からの帰途16マイルの道程を「生涯の危機が近づいているという確信に満ちて、とぼとぼと引返しはじめた」。(325) 母が重体との報せを受け急ぎフリントコム・アッシュからマーロットに向かう。「鋼鉄のように冷たい星空の下、15マイルを歩いて行くために、冷えた春分の暗闇の中へ飛び込んでいった」。(368) 久しぶりに生家に戻り、母の病気も思ったほどのこともなくほっとしたのも束の間、その先に待っていたのは、終身借地人である父の死という最悪の結果であった。T. タナーは作品に特徴的な 'walking, traveling, movement' について述べている。

... her journey again leads her into portents of the life ahead of her... Always Tess had to move, usually to harsher and more punishing territories.³⁾

フリントコム・アッシュに向かう途中テスは、かつて婚約中にエンジェルと町に行った時、彼が喧嘩した男に声をかけられて逃げる。そこで隠れた「落葉樹の間に生えている柵 (holly) の葉の茂み」は、死のイメージを宿している。⁴⁾

The wife of Angel Clare put her hand to her brow, and felt its curve, and the edges of her eye-sockets perceptible under the soft

skin, and thought as she did so that a time would come when that bone would be bare. 'I wish it were now,' she said. (301)

夜半、木の葉の間に、耳慣れぬ物音を聞く。「それはあるときは動悸のように、またあるときは羽ばたきのように聞こえ、一種の喘ぎか、ごぼごぼする音のようでもあった」。朝になってみると、

Under the trees several pheasants lay about, their rich plumage dabbled with blood... all of them writhing in agony, except the fortunate ones whose tortures had ended during the night by the inability of nature to bear more.(302)

生き残っている鳥たちを苦しみから救うために、首をひねって殺してやる。その時の真っ赤な鮮血のイメージは、アレック殺害とそこから帰結するテスの死につながってゆく。エンジェルと別れてから8ヶ月、いくつかの小さな仕事を経て、追われるようにしてフリントコム・アッシュに向かうテスの姿からはすでに最終的破滅の遠くないことが暗示されている。

テスがエンジェルから渡されて用いる金額が具体的に数字で書き込まれ、物語に現実味を添えるが、そこからはまた観念と現実の相剋が浮かび上がってくる。別居してブラジルに渡るというエンジェルから50ポンドを貰い受け、半分を両親に与え、残り半分は働けない悪天候の期間、止むなくそれに頼らざるをえない。

She could not bear to let them (her sovereigns) go. Angel had put them into her hand, had obtained them bright and new from his bank for her; his touch had consecrated them to souvenirs of himself — they appeared to have had as yet no other history than such as was created by his and her own experiences — and to disperse them was like giving away relics.

But she had to do it, and one by one they left her hands.(297-8)
手元に残った25ポンドは、エンジェルの形見 (souvenirs) すなわちシンボ

ルとして大切に取っておきたかった。しかしテスが置かれた圧倒的逆境のもとでその金はシンボルとして留まることができずに、一枚一枚と生活の元手となって離れていった。ここに現実と観念の相剋と結局の現実の勝利という作品に一貫した性格が窺える。と同時に、現実には生活の基盤をもたないエンジェルとテスの愛（観念的形態）のもろさを露呈することとなる。その結果テスはさらに苛酷な現実、フリントコム・アッシュでの激しい労働に直面せざるをえない。最初の金がなくなった頃に、新たにエンジェルの銀行から30ポンド入るが、そのうちの20ポンドは家の屋根をふきかえるのに送り、残りは冬支度に当てる。最後の1ポンドも使い果たしたとき、「一番好きになれない、荒っぽい重労働——耕地での労働」(305)に赴くことを余儀なくされる。

シンボルやイメージ等の記号的作用の次元が大きだけでなく、同時に現実の有様が如実に書き込まれ、記号的作用はその現実を集中的に指し示してゆくのが本作品の特徴である。そのことをフリントコム・アッシュ農場を中心に見てゆくことにしたい。そこでの最底辺の苛酷な労働がテスの終末を必然的なものとし、テスの破滅が彼女に限らない田舎の下層の人々の悲劇の象徴となっている。ハウはこの箇所についてハーディの筆致を「人間の落ちぶれた状態や苛酷な現実を哀れみをもって描くことにおいてゾラにもドライサーにも劣らない」と評している。⁹⁾

歩いて二日目の夕方、テスは変化の多い白亜質の高地に着いた。そこはまるで乳房の女神シビリが仰向けに寝そべっているかのように、テスの生れ故郷の盆地と彼女の恋人の家のある盆地の間に延びていた。(305) フリントコム・アッシュ農場は噂に違わず瘦地であった。とりわけ蕪畑は、球のようなものや、先の尖ったものや、陰茎型をしたものなど、無数の白い散在した火打ち石からなっている、白亜層の中の石の多いランチェットの上に盛り上がって、この農場の中でも一番高い土地にひとつづきとなって100エーカー余り広がっていた。(309)

ときに季節は冬。テスとマリアンは何時間も腰を折って蕪を掘りつづけた。

「この畑はとても高いところにあるので、雨は上から下に降るのではなく、うなりをあげる風に乗って水平に吹きつけ、二人がずぶ濡れになるまで、ガラスの破片のように突き刺し」てくるのであった。(310)

トールボットヘイズには生命のイメージが充溢していることは前稿で指摘したが、それと対照をなしてフrintコム・アッシュの荒涼とした世界を白色系のイメージが強調している。白亜質の地層のために風が吹くとすぐに白い埃が舞い上がる。

Here the air was dry and cold, and the long cart-roads were blown white and dusty within a few hours after rain. There were few trees, or none... (305)

わびしい焦げ茶色の畑に輪郭を失った白い空が覆いかぶさってくる。

...the whole field was in colour a desolate drab... The sky wore, in another colour, the same likeness; a white vacuity of countenance with the lineaments gone. So these two upper and nether visages confronted each other all day long, the white face looking down on the brown face, and the brown face looking up at the white face... (309)

雨の中、蕪掘りをする畑に「鉛色をした光」が射している。やがてここ何年来なかったような冬がやってきた。

Every twig was covered with a white nap as of fur grown from the rind during the night, giving it four times its usual stoutness; the whole bush or tree forming a staring sketch in white lines on the mournful gray of the sky and horizon. Cobwebs revealed their presence on sheds and walls...hanging like loops of white worsted from salient points of the out-houses, posts, and gates. (311-2)

「雪は白い柱となって、北極の平地から鳥のあとを追ってやってきた」。「空気

は、痛め付ける無数の白いものに悩まされて青白くなり、奇妙に雪を捻ったり回したりして、無数の混沌を思わせ」るのであった。(313) 脱穀のあとテスの顔は「物の怪に憑かれたみたいに」血の気が失せ、「最も元気だった者も、顔色はしだいに青ざめて」いった。(第47, 48章) フリントコム・アッシュを覆う白いイメージは全編に充溢する赤のイメージとは対照をなし、荒涼とした自然の条件を表わし、近づきつつあるテスの人生の終末と重なってゆく。

厳寒の時期が来て、北極から見馴れぬ鳥が、フリントコム・アッシュの高台へ音もなく飛来してきた。天変地異の恐ろしい光景を目撃して半ば盲目になった、やせて幽霊のような鳥は、この畑で働くテスにとって不吉な予兆であり、アレックが纏う不吉なイメージと二重写しとなる。

年代記作家としてのハーディの記述に従い村の形態を分類すると、地主が世話をする村、村自体が営む村、そして、村自体も地主も面倒をみない村の三つになる。換言すれば、在住する地主の小作人たちがやっている村、フリーホルダーかコピーホルダーからなる村、そして不在地主が地代をとって土地を貸している村に分けられる。(309) マーロットの場合はフリーホルダーあるいはコピーホルダーからなる村であり、村人の多くは行商人であるテスの父親のような中間階級か日雇い労働者で、不安定ながらも——借地権が切れるとたいてい追い出される——共同体的自治運営がなされ、小さいながら割当て地を分けてもらって耕作している。トルボットヘイズは、「住みつきの地主がいないので、イギリス農村の気分を抑えつけるただ一つの因習的な拘束も」ない。(197) 不在地主制下にあるが、酪農家が自立性をもって経営をなしている。イギリス農業をとりまく国際的環境の変化と都市住民の生活様式の変化に伴って、⁶⁾ 発展性のある酪農経営がなされており、それは農場主夫妻の人のよさに反映している。フリントコム・アッシュは農場経営者が不在地主に地代を払って土地を借り受け、農業労働者を雇用して資本家的に農業を営む19世紀イギリス農村に支配的となった経営形態である。フリントコム・アッシュでの苛酷な労働はこの形態と切り離しては考えられない。

農場主グロービーは、テスを取り巻く二人の男、エンジェルやアレックとは全く異質の人物であり、テスを色恋の対象と見ることがない。「おれがおまえに惚れているとでも思ったのかい？……そんなばかげた考えを田舎娘の頭から叩きだすには、冬の野良仕事ほどいいものはねえ」と言う。納屋での麦扱きが余りにつらく、テスが弱りこんで崩れ折れると、「今日中に済ませてほしいんだ」と言い放って容赦しない。(315-6)

エンジン係りの男が翌日は別の農場と契約があるので、麦むらはその夜のうちに片付けてしまえと、午後になって、農場主はみんなに告げた。それでエンジンの響きは、今までにもまして休みなくつづいた。「喘ぎをともなった痛みが、麦むらを貫いて走った……彼らの中で最も元気だった者も、顔色はしだいに青ざめ、目の玉が皿のように丸くなってきた」。この激しい農作業の描写には、痩せた土地から労働力を酷使して最大限の収益を効率よくあげようとする農業資本家の本性があらわれている。(356-7)

1850年代から60年代にかけて多かった婦人や少年少女の労働が、社会的な批判を受けて次第に少なくなってきた。80年代イングランド南部を舞台に展開されるこの物語にはそれについての過渡期の姿が描かれている。旧暦の告知節の日(3月25日)までいるという条件で、テスはフリントコム・アッシュ農場に雇い入れられた。「最近では女で野良仕事をしようとするものはほとんどいなかったし、女手で男同様にできる仕事なら、賃金の安い女を雇うほうが得策だった」からである。(308) 脱穀機に藁を食ます男に解いた藁束を供給する役に作業の手際がよいとテスが選ばれたが、「たぶん経済上の理由からであろうが、とくにこの仕事に選ばれるのは通例、女であった」。そのことにたいしてアレックは「蒸気脱穀に女を使う権利はないということを農場主に言ってやったんだよ。女向きの仕事じゃない。もっと上等な農場ではどこでもとっくの昔に止めているんだ」と抗議している。(358) フリントコム・アッシュは当時のイギリスの借地農場のなかでもとりわけ労働条件の劣悪な部類に入っていた。

テスは他に行く当てもなくマリアンに誘われてフリントコム・アッシュにやっ

てきた。まもなくトールボットヘイズでの仲間イズをも呼び寄せる。そこには他に、近くの村から二人の女、例のスペードの女王とその妹、ダイヤの女王もやってきていた。テスの境遇は彼女のみに限られなかったのである。このことについてメイン・ウィリアムズは次のように述べている。

Hardy's purpose is to show that here, where the agricultural life of England is most brutal, all these girls, whatever their individual differences, are reduced to slaves of the system — both the technically chaste and the technically fallen, those who have kept their human integrity in spite of circumstances and those who have let themselves become brutalised. From now on, Tess is presented increasingly as the representative of an entire group.⁷⁾

テスが蒙った容赦のない激しい労働は、当時のイギリス農村の最底辺の人々の典型となっており、ファーバンクがいう「テスは個別化されていると同時に一般化されている」⁸⁾ という指摘は妥当である。

蒸気エンジンの機関手は名前を聞かれたら「機関手」と答えるだけの匿名の人物であり、雇われさえすれば仕事の対象は「麦でも、藁でも、混沌でも」何でもよく、たまたま農業の世界に従事しているものの、この世界には属さない異質の人間である。彼のことばには「北方の訛り」があり、「植物と天候と霜と太陽に仕える」よりもむしろ「火と煙に仕えている」。古老らに、からざおを使って脱穀した昔のことを「結果は今よりよかった」と嘆かせているが、「赤い色の暴君」は伝統的南部の農村社会にたいして破壊的な力をもって侵入してきた北部の産業資本の象徴でもある。(348-9)

ところでここで我々はとても興味深い批評を読むことができる。それはレイモンド・ウィリアムズの『都会と田舎』に収められたハーディ論である。しばらくウィリアムズの見解を追ってみよう。

有名な脱穀機の描写は、しばしば『テス』の基本的な展開は田舎の人

間性対異質な産業主義という対立に立つものであるという主張を裏書きするものとして引き合いに出される……。しかしこれがまた物語のなかのひとつの事件——現実の脱穀機の行動——でもあるという事実を目をつむることはできない。脱穀機がこの畑に据えられ、何時間も動きつづけるのは、それが産業主義によってではなく、農場主によって賃借りされているからである。⁹⁾

ウィリアムズの議論の特徴は、飛躍した結論が命題として先にあり、作品分析は追って従うというものであるが、具体的に指摘しよう。脱穀の描写は、「ひとつの事件」あるいは「行動」であるのはもちろんであるが、それがさらに一般的な社会的現象を指し示さないことはない。個別を通して普遍を現わすのが文学の機能であるからして。¹⁰⁾ 脱穀機は「産業主義によってではなく、農場主に賃借りされている」のだという。それは背景となっている当時のイギリス農業の性格についての無知を告白するに等しい議論である。農場主は資本家的性格を帯びており、その背後には北部の産業資本やロンドンの金融資本が存在していたことは歴史的事実である。

さらにウィリアムズは、脱穀をしているテスのところに、アレックが現れるのをとらえて、「愛と労働が、労働と選択の痛みが、ひとつの次元におさめられる」、この点で「ハーディは、その深さにおいてあらゆる田園ものを凌駕する」という。¹¹⁾ 愛や労働という抽象的次元に逃げ込むのがウィリアムズの批評の常套であるが、作品に具体的にそくして言えば、フロントコム・アッシュの場面で、テスはアレックの誘惑にたいして「重大な情緒的決断」をしてはいない。再び誘いに屈したのは、父の死という一家の破局に瀕して余儀なくなされたものである。「悲劇的に孤立した終局を迎えながら、なおハーディは、仕事にまた愛に……ともに生きる人間の力強さと暖かさをたえず描きつづけた」とウィリアムズは主張するが、愛と労働がひとつになっているとはトルボットヘイズにおいて言えるとしても、フロントコム・アッシュには当てはまらない。もしそうであるとするなら、そこでの苛酷な労働の本質を見誤ることにな

り、テスの最終的な破滅は全く説明のつかないものになるであろう。

II

フロントコム・アッシュでの苛酷な農作業のシーンのみが仔細に描かれていたら、『テス』は自然主義的な作品になっていたかもしれない。しかしそこにアレックがテスの誘惑に頻繁に登場することによって、前稿で指摘したこの作品に独特な二重の構造が浮かび上がってくる。アレックを欠いては『テス』という主人公の短い変転の激しい人生ドラマを中心に展開する作品は成り立ちえなかったであろう。その不可欠の人物、アレックの性格と役割について少しく考察してみたい。ケトルはアレックを「ヴィクトリア朝メロドラマに月並みな悪漢」¹²⁾ というが、その中身はかなり複雑であり、ハウは“Alec appears in a double guise: he is both kinder and crueler to Tess than is anyone else, both more humane and sinister.”と述べているところである。¹³⁾

アレックの行動にはストーリーの流れからして唐突に見えるところがいくつもある。その代表的な例として、彼の改宗がある。テスは徒労に終わったエミンスター牧師館への訪問からの帰途、偶然にして布教活動をしているアレックに再び運命的に出会う。彼はエンジェルの父親、クレア老師の説教をうけて、いまや熱狂的な福音派の伝道家になっていた。その姿はテスにこう映った。「それは改心というよりもむしろ変形であった。以前には肉欲的であった曲線が、今では献身的な情熱の線に変わっていた」。「テスはぞっとするような奇怪さ、うす気味悪い矛盾を感じた」。(330)

アレックの改宗は奇怪で唐突に見えるが、物語にはそれなりの理由が含まれている。第27と30章で、エンジェルの口から間接的に、クレア老師のアレックへの関わり合いが語られ、それは求婚されて幸せ気分のテスを不安に駆り立てる。エンジェルから感化されたテスの懐疑論、否定論がアレックの信仰熱を冷ます。「その利口な男は、あんなことを彼女に言って聞かせたために、おれが彼女の方に戻って行く道をならしたことになるうとは、少しも考えなかったん

だな」というアレック。(第46章) このように宗教あるいは道徳論を通してテス、エンジェル、アレックの三者(中にクレア老師が介在して)が関係づけられ、アレックの改宗は物語のなかに仕組まれているゆえに全く唐突というわけではない。だが、それを承知したうえでも、なおやはり、アレック本来の俗人的性格からして、彼の改宗には必然性が欠け、無理な設定に見える。だから、結婚申し込みを断られて、「義務が挫かれたための失望とは必ずしもいいきれない失望がダーバヴィルの顔を横切った。それは疑いなく、彼女に対する彼の昔の欲望のようなものが復活した兆しであった」(340)とき、かえって自然であり、アレックは本来の活きた個性を回復している。もうひとつの例として、マーロットに帰り畑で働くテスのところに「襷をとった野良着をつけ」「気味の悪い滑稽さを帯びて」現れるアレックの姿はひどく芝居じみている。アレックのこのように奇怪な行動は、前稿で指摘した作品のゴシック的要素を含むメロドラマ性に属すると考えられる。

アレックはトランリッジでの最初の出会い以来、テスの美しさの変わることのない賛美者である。「たしかに、イヴの口以来、これほど男の気を狂わす口はなかった……テス、君は誘惑者だよ。かわいらしい呪われた、バビロンの魔女だ」。(346-7) 真っ赤な口は彼女のエロスのシンボルとして作中たびたび強調されている。アレックはテスの官能的な美しさ、肉体美に魅了され、テスを所有したいと欲する即物的な男である。この点で、テスの精神面に惹かれ、理想化してやまないエンジェル——例えば、夜、星を見つめていると魂が抜けてゆく、というテスに惹かれてゆく(第19章)——と対照をなす。テスを我がものとするためには、世間体や外聞、法と慣習さえ省みず、手段を選ばない徹底したところがアレックにはある。この点でも、「告白」の後、離婚すればいいというテスを詰るエンジェルと対照的である。

テスの弱みは傾いている一家の暮らしであることを、アレックは他の誰よりも、テス自身さえよりもむしろ、見抜いており、お為ごかしであっても彼女の心を射止めるためには落ちぶれてゆく一家に好意を尽くすことを厭わない。

「たとえ君に夫があったとしても、僕のほうが彼より君に近いと思うよ。ともかく、僕は君を苦勞から救い出そうとしているが、彼は何にもしないんだからね」(358)とアレックは言うが、それは事実である。積極的な攻勢を受け、テスのアレックにたいする頑なな態度も次第に軟化してゆく。「たぶん、あなたは、わたしが思っていたより、もう少しいい人で、親切な人なんですよ……時々、あなたの考えがわからないんです」。(358)

エンジェルに不当な別居を強いられ、さらに音信不通の仕打ちを受けているテスにたいしアレックは官能の面からも訴えてゆく。「忘れないでくれ、僕が以前君の主人だったっていうことを。もう一度、君の主人になるぞ。たとえ、ひとの妻であろうと、君は僕のものなんだ」と。(355)テスはアレックに激しく迫られて、次第に傾いてゆく。「夫でないと彼女は言った。しかし、肉体的な意味では、この男だけが自分の夫であるという意識が、ますます彼女の心に重くのしかかってきた」。(381)こうして二人の一体感が戻ってくる。フリントコム・アッシュの畑でマリアンが見つめて騒ぐ変な形(陰茎)をした火打ち石が、テスとアレックの復活しつつある性的関係の暗喩となっている。(311)

テスは経済的にも肉体的にも——もちろん前者が支配的であるが——アレックの要求と申し出を受け入れて、サンドバーンで愛人生活を送ることになったのであり、エンジェルが帰ってきたからといってアレックを殺害しなければならない必然性は物語のなかにない。

象徴的な要素の強いことが作品全体の特徴であり、それはフリントコム・アッシュの場面にも当てはまることであるが、そのひとつとして「手紙」(第48章)を取り上げてみよう。

I must cry to you in my trouble—I have no one else! I am so exposed to temptation, Angel. I fear to say who it is, and I do not like to write about it at all. But I cling to you in a way you cannot think! Can you come to me now, at once, before anything terrible happens?...I think I must die if you do not

come soon, or tell me to come to you. . . . Come to me — come to me, and save me from what threatens me!(359-60)

ここでテスは、直接にはアレックに誘惑され貞淑を守れなくなる恐怖を頼りにならない夫に訴えているが、それに留まらない切迫感がある。テスの悲痛な声は同時に、作品中すでに充分描かれている伝統的な農村社会に迫っている危機にたいする痛烈な叫びともなって読者の胸に響く効果を有している。

ここまで述べてきたアレックの性格について、もう一度まとめてみたい。アレックの亡父、サイモン・ストークは、イングランド北部で抜け目のない商人として財を築いた成上りで、南部の片田舎に隠遁してきたブルジョアジーであり、アレックはその放蕩息子という設定である。このような事例は実際にはさほど一般的でなかったとしても、ありえたかもしれないほどの蓋然性はある。零落してゆくテス一家にただひとり援助の手を差し伸べるのは豊かな財力を背景にしてである。

アレックは他の誰よりもテスが置かれた窮状をよく認識している現実主義者である。この点でテスを理想化しては幻滅を味わい、彼女の存在を取り巻く状況のなかで直視することのないエンジェルの観念主義と対照をなす。アレックはテスを籠絡することで手段を選ぶことがない。外聞を気にせず、みなが農作業しているところに頻繁に訪れてはテスを口説き、結局は成功する。これらはブルジョアジーの現世的欲望の実現、追求における率直さ、積極性を示している。

アレックはフリントコム・アッシュ以降唯一ともいえるテスのスポンサーであるが、それでも常に不吉なイメージがつきまるとして離れない。プロットからして必然性がないにもかかわらずついにはテスに殺害されてしまう。それはアレックがブルジョアジーとして都市の勢力とつながっており、伝統的な農村社会に敵対する脅威を象徴しているからである。ここにアレックが「友の姿をした敵」として登場してくる歴史的な文脈にそったリアリティがある。

おわりに

前稿に続いて再びアレック「殺害」について考えてみたい。プロットにその必然性のないことはすでに指摘したが、イメージにおいては十分に準備され、必然性を示しているといえる。全編にわたって散見される赤のイメージには、破壊的なエネルギーが隠されていることは指摘されていることであるが、¹⁴⁾とりわけフロントコム・アッシュで農作業の休憩のときに、アレックに言い寄られて、「手袋で顔を打つ」エピソードにおける彼の口から流れ出る真っ赤な血は「殺害」を暗示して、その伏線となっている。テスは反射的に「さあ、わたしを罰してください……ひとたび犠牲になったらいつまでも犠牲——それが掟なんです」と叫ぶ。(354) テスがいう「犠牲」とは直接にはアレックの好色の餌食となることであるが、それに留まらず、社会的な犠牲への連想をも誘うのは、それまでに展開されてきた物語の状況と雰囲気からして自然である。テスの悲劇は伝統的農村社会の破滅のアレゴリーとなる。

テスは一瞬、アレックの妻になることを考えてみる。「そうすれば、彼女を虐待する雇い主に対してだけでなく、彼女を蔑しめているように思われる世間のすべてに対しても、完全に屈従から脱した地位が得られるだろう」と。(343) しかしテスは玉の輿にのりことも、帰ってきたエンジェルとの間でハッピーエンドを迎えることもできなかった。農村をとりまく現実のありようがそれを許さなかったといえる。ここにテスの典型性がある。作者ハーディが「その人を殺したいのではなく、そのような状況を殺したいのだ」¹⁵⁾と言ったことの比喩は物語の悲劇的結末を説明することになる。様々なイメージやシンボルなどの記号的作用がテスの悲劇に集中しながら主題を浮かび上がらせてゆき、そこに作品の成功の一因があるといえよう。

[註]

- 1) テキストには、The New Wessex Edition, *Tess of the d'Urbervilles* (Macmillan, 1974) を用いた。ここからの引用は全て文中の括弧内に頁数のみを記

- す。なお訳文は、岩波文庫版『テス』を参照した。
- 2) 拙稿「『ダーバヴィル家のテス』試論(1) — 悲劇の二重構造として」『山形県立米沢女子短期大学紀要』第28号(1994)参照。以下前稿とする。
 - 3) Tony Tanner, "Colour and Movement in *Tess*" in *Modern Critical Interpretations, Tess of the d'Urbervilles*, ed. Harold Bloom (New York:Chelsea House Publishers, 1987), p.14.
 - 4) 『イメージ・シンボル事典』(大修館, 1984) 参照。
 - 5) Irving Howe, *Thomas Hardy* (London, 1966), pp.124.
 - 6) 拙稿「ハーディ文学の社会的背景」『山形県立米沢女子短期大学紀要』第27号(1993), 「19世紀後半, イングランド南西部の農村社会について」『山形県立米沢女子短期大学生生活文化研究所報告』第20号(1993) 参照。
 - 7) Merryn Williams, *Thomas Hardy and Rural England* (Columbia Univ. Press,1972), p.96.
 - 8) P. N. Furbank, 'Introduction to The New Wessex Edition, *Tess*' (1974), p.20.
 - 9) Raymond Williams, *The Country and the City* (Oxford, 1973). R.ウィリアムズ『都会と田舎』, 山本和平他訳(晶文社, 1985), pp.282-3.
 - 10) 拙稿「文学のリアリティとは何か」『世界文学』No.78(1993.12) 参照。
 - 11) R. ウィリアムズ, p.284.
 - 12) Arnold Kettle, *An Introduction to the English Novel*, vol. II (London,1953), p.50.
 - 13) Howe, p.126.
 - 14) J. Hills Miller は全編に繰り返し現われる赤のイメージについて次のように述べている。'All these red things are marks made by that creative and destructive energy. . . .' "*Tess of the d'Urbervilles: Repetition as Immanent Design*", in *Modern Critical Interpretations, Tess of the d'Urbervilles*, ed. Harold Bloom (New York: Chelsea House Publishers, 1987), p.68.
 - 15) Florence E. Hardy, *The Life of Thomas Hardy 1840-1928* (Macmillan, 1962), p.221.